

開 目 抄

佐渡国誌によると、

「日蓮ノ佐渡ニアル三年間、他宗僧徒ノ迫害アルニ拘ハラズ、ソノ学徳ノ高キニ服シ、改宗帰依シタルモノ、多キノミナラズ、所在ノ地頭等ノ保護モ益々厚カリシハ、日蓮サツテ後、数年ソノ宗、寺院ノ開基セラルモノアルニ至レリ

案スルニ是ヨリ以後ノ宗教界ニ一沿革ヲ生シタルカ如シ、日蓮ノ在島中主トシテ之レニ反抗シタルモノハ、浄土宗ノ僧侶ニシテ、日蓮ノ遺文ニヨレバ印性房慈道房ノ如キハ常に他宗ニ先ダチテ、最モ勢カアリ（或ハ鎌倉極樂寺ノ良観房ノ使喚シタルモノアルヘキモ）タルヲ見レハ、当時該宗ノ広ク弘布シテ寺院モ相当備ハリタルヘキニ日蓮宗ノ漸ク盛ナルニ及テハ、ソノ宗漸ク衰ヘソノ盛衰ノ状ハ恰モ反比例ナシタルカ如ク思ハル、真言曹洞二宗ノ如キハ今猶ホ幾多ノ大寺アリテ往昔ノ盛況ヲ想ハシムルモノアルモ、浄土宗ニ至リテハ、寺数甚ダ少クシテ悉ク貧地ナルノミナラズ、ソノ開基モ天正以前ニ於テセルモノハ極ノテ少ク、大抵ハ皆江戸幕府ノ初メテ建立シタ

ルモノニテ、一時同宗ノ非常ニ衰微シタル事アルヲ推知セラルルナリ、之レニ反シテ日蓮宗ハ一ノ谷ナル妙照寺、竹田ナル妙宣寺ノ如キ八日蓮ノ在世ニスデニ、ソノ基ヲ開キテ忽チニ大寺トナリ、後チニタテタル根本寺ト共ニ、今尚ホ、ソノ寺格ヲ保チテ北陸ノ名刹タリ」とある。塚原問答の影響が、第三者の手でかかれておるので引用してみた。

最近の研究である、「浄土思想」民族学、池上広正氏は（昭三九・二・六）の毎日新聞紙上で「徳川家康一族が浄土宗であつたので、秀吉に味方した大名たちの多くが、家康に帰順後は、にわかには、浄土宗に改宗したことは、宗教と政治との結合という点で興味ぶかい。（天正以後佐渡に念仏の寺の出来た理由がわかる）去年の春、私は若い六人の宗教学者と一緒に最近の仏教主要宗派の総寺院数とこれに対する各宗派別寺院数の比率を調べ、またその、全国分布の状態を調べたことがあつた。その結果、総寺院数六九四三寺のうち日蓮系一割弱、真言、天台二割強、禅系三割弱、浄土系四割となり、浄土系の比率が最もたかく、またその分布地域は、北海道、上越、北陸、中部、近畿、紀伊中国、九州中央部にまで及んでいて、この分布地域は、他の諸宗派に比べると、かなり広いことがわかつた」

とある。東京タワーで今は有名になつておる芝増上寺も、昔は日蓮宗であつたのだが、徳川家康が江戸入りの途中、あそこまできて、休息した時、茶をのみながら、この寺の宗旨はときかれ、日蓮宗でございますと答えたら、それはいかん、以後浄土宗になれと言われて、住職は追い

だされて今のように浄土宗になったということである。「神君の御一言」で返答などは無用であったのだ。

さて、以上の引用によつて、浄土宗が何故勢力を得たかの理由もはっきりした訳である。大聖人の末弟と称する徒輩なら、四箇の格言の第一番たる念仏無間を絶叫しなければならぬのが全日仏や日仏連等をみると、中々そうではない。大聖人の精神を忘れてゐる日蓮門下が多いのではないかと思ふ。

大聖人さまの仏法は、末法万年の教えであるから、念仏宗が今以つて一番勢力があると言うことは、いよいよ、折伏の精神に徹して、我等は広宣流布にいきがいを感じるものだと確信する。

さて、大聖人さまは、

「十一月一日（文永八年）に六郎左衛門が家のうしろ、塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮台野のように死人を捨つる所に、一間四面なる堂の仏もなし、上は板間あはず、四壁はあばらに雪ふりつもりて消ゆることなし、かかる所にしきりは打ちしき蕘うちきて、夜をあかし日をくらす、夜は雪雹雷電ひまなし、昼は日の光もささせ給はず心細かるべきすまいなり」（註一）（全集九一六ページ）

さて、開目抄の下に、

「日蓮と言いし者は去年九月十二日、子丑の時に頸はねられぬ。これは魂魄佐土の国にいたり

て、返る年の二月雪中にしるして有縁の弟子に贈くれば、おそろしくておそろしからず、みんないかにおぢぬらん」（註二）（全集二三三ページ）

との御文章があるが、雪中において世界人類の盲目を開くの書がかれたことは大いに意義があるのである。私の「富士の巻の一」は、戦後早々で机が買えなくて、古塔婆でこしらえた机で書いたのだが、それとこれとは似るべくもないが、立派な文章は逆境においてこそなると実に有難いと拝するものである。

さて、塚原の山野では到底普通人では生きていける筈がないのであるが、その御心中においては「あらうれしや」と法華経体験を心から喜び「仏滅後、二千二百余年が間、恐らくは天台智者大師も一切世間多怨難信の経文をば行じ給はず、さくさくけんひんすい数数見擯出（度々自分のすむ所を追われること）の明文は但日蓮一人なり」（註三）

と覚悟されての毎日の御生活であった。

「我が身法華経の行者に非ざるか、この疑いはこの書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれを書く上、疑を強くして答をかまうべし」（註四）（全集二〇三ページ）とあって、することなすことが、毎日法華経の六万九千三百八十四字を身に読むところの御生活であった。

塚原問答は先述の如く一月十六日であったが、文永八年の十一月より普通人ではたえられない環境にあって、この開目抄の構想をねられて二月頃迄に制作せられ、四条金吾殿の使いがこられ

たので、これに托して、日蓮門下に示されたのが、開目抄である。

日道上人の御伝士代によると（大聖人さまの伝記では最古のもの祖滅六十年頃）「日興上人は文永四年九月十二日大聖人の御勘氣の時、佐渡の島へ御供あり、御年二十六歳なり」とあるが、大聖人さまが流人の故に、塚原に一緒におることは禁じられたと思う。現在の世尊寺という寺が、日興上人の開基になっておる所から察すると、そのあたりにすまわれて、遠くから大聖人さまに御奉公申し上げたのであらう。

当時は流罪人は最初の一か年の生活費は官給であつて、それがすぎると、自営自活せねばならないことになつていたと言う。大聖人さまは塚原問答後自界叛逆の難が、的中して、地頭の本間六郎左衛門の捨邪帰正によつて、四月には一の谷に移られている。日興上人の御奉公が公然となつたのはこの四月以後と考えてよからう。それまでは、日興上人は御奉公の心をもちながら、御奉公できぬ悲しさを十分に味つたことと考える。

日興上人は、この開目抄の上に、自ら、法華本門開目抄と題された。

「総シテコノ書等ニ法華本門ト題スルコトハ日興上人ノ御尊意ナリ、余カ門徒ハ但開目抄等トアルベシ、サレバ、法華本門ト云フガ肝心ナリ、コノ本門トハ諸門流ニ沙汰スル処ノ本門ニアラズ（略）寿命品ノ文ノ上ト文ノ底トニテ沙汰スル処ナリ、寿命品ノ文ノ上トハ在世（釈尊）ノ寿命品ノ事、文ノ底トハ滅後末法ノ寿命品ノ事ナリ」（註五）

「題二法華本門開目ト云フハ是レ興師ノ深義ナリ、法華ノ二字ハ部ヲ挙グルナリ、本門ノ二字ハ要ヲトルナリ、開目ノ二字ハ、事ノ本尊ニ向ツテ、信ノ慧眼ヲ開キ迹ヲ開シテ本ヲ顯ハシ、脱ヲ去ツテ種ヲトル、ソノ証文ヲ引カハ文ニ曰ク「涌出寿量ノ二品ニハツクベキ」ソノ二ニ曰ク「寿量品ヲ知ラザル諸宗ノ学者ハ禽獸ニ同ジ」ソノ三ニ曰ク「寿量品ナクンバ天ニ日月ナク人ニ魂魄ナカラン」ト、是レ等ハ皆ナコレ法華本門ト題ス可キ証ナリ」（註六）

以上の註によれば、我々の信解の上から言うならば、単に開目抄と呼ばずして、法華本門開目抄と拝するのが、富士の法義の深義をのべる由縁となると思ふものである。

富士一跡門徒存知事（日興上人法筆）には、

「一、開目抄一卷、今開いて上下となす、佐土国の御作、四条金吾頼基に賜う、日興所持の本は

第二転なり、未だ正本を以て之を校かんがへず」（全集一六〇四ページ）

とあつて法華本門の四字は欠けておるが、日要師が（祖滅二百年頃）みた開目抄には、この四字があつたのであろう。

「涅槃經に一切衆生ノ諸ノ苦ヲ受クルハ皆是レ如来ノ苦ト云々、今ハ曰ク一切衆生ノ諸ノ苦ヲ受クルハ皆コレ日蓮一人ノ苦ナリ」

この自覚に立たれて覚他（他人をさとらしめること）せしめんがための開目抄である。因みに仏とは大和言葉であつて、煩惱がほとけるとか、仏教が渡来した後に熱病が流行したから、ほと

りけが、ほとけになつた等々出典が四つ五つあるが、仏とは本来は自覚々他、自分も悟り、そしてその悟りを人に教えて他を、覺らしめるの意を仏と言うのである。

故に大聖人さま開目抄の著述の境地は、如上の自覚々他即ち仏たるの境地から、著述せられたことは動かすことの出来ぬところである。ては、その開目とは如何なる開目か。「日本国ニ此レヲ知ル者ハ但日蓮一人ナリ」と言われておるが、今、日要師に従へば、

「高祖聖人自解仏乗ノ事、清澄山ノ明星ノ池ニテ本化ノ菩薩ナレバ此レニテ自解仏乗シ給ヘリ、口伝ニ有リ」

一 二ハ經文ニアタツテノ自解仏乗、弘長ノ夏ノ頃、伊豆ニ流サレ給ヒテトガモヲボヘヌニ流罪ハ不審ナリ、知法思國ノ故ニコソ安國論ヲ作ツテ奏スルニ不思議々々ナル哉トヲボシメシガ、ゲニゲニ（実ニ）勸持品ノ数数見擯出ノ經文ニアウ事ヨ、我ハ上行菩薩ナリケルト自解仏乗シ給フ

二 二ハ伊豆ヨリ帰り給ヒテ、老婆ニ見參ノ為ニ安房ヘ下リ給ヒシ時、東条左衛門ニアツテ及加刀杖ノ難ナリ

三 二ハ鎌倉ニテ雨ノ祈ニヨツテ良觀房等ノ讒言アリシカバ又竜ノ口ニ頸ノ座ニナヲリ給ウコト刀杖ノ難ナリ

四 八又佐渡ノ国エ流サレ給イテ数数ノ二字ヲ伊豆ノ配所ノ時ハ一字コソ読ミシニ今ハ二字ヲ

読ム、サテコソ我ハ上行菩薩本因妙ノ導師末法下種ノ本尊ナリケリト自解仏乗シ給イテコソ有縁ノ御弟子ノ中に開目抄ヲ作テ御遺シ有ケルナリ」(註七)

とあつて丁寧を極めて開目するの動機を述べられておる。文中私見とは少々異なる所もあるが、今は大綱を言うて細目には渡らないで置き、これは後述にゆずる。

論が飛躍してしまつたので、ここで最初にもどつて、何故開目抄が書かれたかをのべてみる。

大聖人が佐渡配流となつて、大聖人門下に動搖の起きたことは十分に察せられる。

日朗上人以下数名の人々は牢内にとらわれ、所領を没収せられた信徒もあり、所を追われた信者もいた。なかならず、大聖人の心を痛めさせたのは、少輔房であつたらう。この少輔房は、文永六、七年頃京都に登つて、公卿の前で法華經を講義したことを威張つて、大聖人に報告して、うんと叱責せられたのだが、その後、大聖人の門下を退転して、大聖人の竜の口や、佐渡の難が出来ると、自己の先見の明あるを誇り、大聖人の門下の道俗を誘惑して退転せしめた。

「大魔のつきたる者どもは一人を教訓しをとしつれば、それを引懸ひっかけにして多くの人をせめおとすなり。日蓮が弟子に少輔房と申し、能登坊と言ひ、名越の尼なんど申せし者どもは、慾ふかく、心臆病に愚痴にして而も智者と名乗りしやつばらなりしかば、事のおこりし時、たよりをえて、

多くの人をおとせしなり」（全集一五三九ページ）

とは少輔房が自分以外の、沢山の人々の信仰を退転させたことを語るものである。

大聖人が、伊豆流罪以後は、法華經の行者と常に称したのに対して、これを、少輔房、能登坊、名越の尼、三位日行、大進坊等々が大聖人さまの門下を愚弄して、

「日蓮が、法華經の行者と言っておるが、日蓮が常に口に行っている法華經からみれば、大変な相違である。法華經の安樂行品に「天の諸々の童子を以て給使をする。刀杖も加えず、毒も害することが出来ない」又「もし人にくみののしらば口則ち閉塞せん」葉草喩品（法華經第五）には「現世は安穩にして後生は善処ならん」陀羅尼品（法華經第二十六）「頭破ぶれて七分となること阿梨樹の枝の如くならん」勸発品（法華經二十八）「亦現世に於いてその福報を得ん」「もしもまたこの經典を受持せん者を見てその過悪を出ださん、もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ、この人現世に白癩の病を得ん」（全集三〇ページ）

安樂行品に曰く「ねが楽って人及び經典の過を説かざれ、亦諸余の法師を輕慢せざれ」（全集二三四ページ）

等々の法華經を引用して大聖人に反対した、しかも名越の尼などは、大聖人さまが鎌倉にでた建長五年以来、その庇護にあたり、ために大聖人は佐渡配流以前は、名越に草庵を結んだ程である。その尼が、信心を退転したのだから、影響するところは大きかったに違いない。但しこの名越

の尼は、大聖人が、誰しも夢想しなかつた、佐渡御赦免となると、再び信仰をつづけるようになり、八年後の建治三年には、大聖人さまに、御本尊書写をお願い申し出たが、大聖人さまは、御本尊をこの尼に許されなかつたことは、前述したとおりである。

さてこのような鎌倉の状態であつたので、大聖人さまは「日蓮が強義経文に符合せり」との見地から執筆せられて、それが法華経の本当の精神であることをのべられたのである。

日本に弘まつた宗旨だけでも十指にあまるが法華経という經典が一番の径文であり、釈尊自らが「諸経中王最爲第一」と言われておることを開目抄では徹底的に論じられ、ついで、その法華経の弘まるべき時機はいつかと言うと、末法の今であると申されておる。これもまた法華経に、「後五百歳広宣流布」とあるのであるから、単なる大聖人さまの断定ではないのである。

さて、法華経が末法に於いて流布すると言つても、その弘まる所の中心がなければならぬ。その中心は日本国なのである。

今暫く、日寛上人の御指南を拝借する。

「第四に国を知るとは通じて之れを論ずれば法華有縁の国なり、別して之れを論ずれば本門三大秘法広宣流布の根本の妙国なり、

日本の名にしばらく三意あり、

(一) には所弘の法を表じて日本と名くるなり、謂く日はこれ能譬、本はこれ所譬、法譬ともに

挙げて日本と名くるなり、經にいわく、又日天子の能く諸の闇を除くが如し、宗祖いわく、「日蓮曰く日は本門に譬ふるなり」、日は文底独一本門に譬ふるなり、四条抄に名の目出度きは日本第一と云う是なり。

(二) に能弘の人を表して日本と名くるなり、謂く日蓮が本国なるが故なり、故に顕仏未来記にいわく、天竺漢土に亦法華經の行者之あるか如何ん。答えていわく四天下の中に全く二の日なく四海の内に豈尙主あらんや云々、故に知ぬこの国は日蓮の本国なり。

(三) には本門広布の根本を表して日本と名づくるなり、謂く日は即ち文底独一の本門三大秘法なり、本は即ちこの秘法広宣流布の根本なり、故に日本と云うなり。応に知るべし月は西より東に向う、日は東より西に入る之を思ひ合すべし、しかれば即ち日本国は本因妙の教主日蓮大聖人の本国にして本門三大秘法広宣流布の根本の国なり」(聖典八八六ページ)

以上が、日本国と日蓮大聖人さまとの靈瑞感通の嘉名かめい早立の故で後述の文を今は略しておく。

さて末法に法華經が日本を中心としてひろめなければならんことがわかったとしたら、どういう態度でこれを弘めるかと言うと、これは折伏による以外はないのである。折伏をすれば難のくすることは前述したが、では、その前代未聞の法華經の折伏者とは、一体どういう人であるのだから

うか。読者は必らず開目抄を読むもの、或いは読んだものとしてその内容には十分にふれないが、この開目抄だけを読んで、大聖人さまに帰依した有名な人々のおることなどを忘れてはならない。

開目抄の大意については五十九代日尊上人の大意述作を略述してみることにする。

「それ一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、主師親これなり」とその尊敬すべき主目を標出し、支那の儒道より印度のバラモンに及び又三国の仏道にその時々主師親を判釈して最後に「日蓮は日本国の諸人の主師親なり」と結勸されておる。繁煩な引文は省略するとして、ここに最も驚愕すべき大問題は、説道の順次によらずして、突如として昂起せる左の聖文である。

「一念三千の法門は但法華経の本門、寿量品の文の底に秘ししづめたり、竜樹、天親、知つてしかもいまだ、ひろいだけさず、但我が天台智者のみこれをいだけり」(全集一八九ページ)

この金文は、富士門の古師は、皆本抄第一肝要の文底深秘の真文と絶唱せられておるに引きかえ、他門では冷眼視勝ちである。それは、本文が下巻にも入り、又本迹相對の要所にでもあるのなら重要視せんも、今は全く権実相對の序文に略説せらるる天台付順の一念三千説のようにみゆるのであるから、大聖人主張の極説には間遠いことのようにかたづけて、大悲深秘の文脈に思いつかずして却つて富正義を妄判しておる。正宗の信者は勿論のことであるが、異見の人々も深くここに開目して、この見地にたちて、長篇の権実、本述相對的のべられておる史説にも、法理

にも暢達せられんことを望む。大聖人自ら、「これは魂魄佐渡の国に至る」とは、その聖き靈なるものは何ぞと言う時、極々上級にみてそれは上行菩薩であり。それが大聖人の本地であるとす。即ち竜口で発迹顕本したと迄しか目が開かぬのである。これこそ富士門古抄の所判の如く「他は全く閉眼盲目で日興一人のみが開目」とあるのがそれで、即ち師弟不二・師資相伝の辺から言うとき五老（註八）は閉眼盲目、日興上人一人のみ開目正視となる。

示同凡夫僧の日蓮の首は竜口で刎ねられて、死後の心霊が、佐渡より開目抄を遺教とする御文の意を、一般の日蓮教徒は、この心霊の本地こそ、法華本門に顕われたる、六万恒沙ごうじゃの大菩薩の上首たる上行菩薩である。されば、大聖人は本化上行菩薩の再誕として尊敬し、最大上級の信念を發起したものと自負しておるようであるが、却って煩惱無明の断否を無視したるに拘わらず、内実には、凡夫僧の宗祖をば、強いて教相文上の菩薩の断惑位の高地に押し上げたるかにみゆるは如何なものか。これよりも未断惑なる元初本因妙の初位に落居せしめてこそ、却って我等一迷を断じ得ぬ人倫の中に沈没して一步も浮かび出でざる迷者に対せらるるこそ能所相応して久未一雙の利益が輝くではないか」

以上は堀上人の所説の引用であるが、

要するに一念三千の法門は成仏を論ずる原理であるが、「寿命品ノ文ノ上トハ在世ノ寿命品ノコト、文ノ底トハ滅後末法ノ寿命品ノコトナリ」の日要師の言葉が一番理解しやすい。そして、

末法は文底の寿命品でなければ、われ等は救われないのである。われ等を救つて下される方は、この文底の寿命品を示すところの大聖人であると言ふことを明かすのである。

「在世ノ本門ト末法ノ初トハ一同に純円ナリ、但シ彼レハ脱、此レハ種ナリ、彼レハ一品二半、コレハ但題目ノ五字ナリ」（全集二四九ページ）とある。「総シテ当宗当家ノ心ハ久遠常住三世ノ中ニハ過去ニ宗旨ヲ立ルナリ」と日要師が言われたのは大石寺九代の日有上人の

「当宗本尊のこと、日蓮聖人に限り奉るべし、よつて今の弘法は流通なり滅後の宗旨なるが故に未断惑の導師を本尊とするなり」（聖典九七九ページ）

「当宗には断惑証理の在世正宗の機に対するところの釈迦をば本尊には安置せざるなり、（略）釈迦の因行を本尊とするなり、その故は我等が高祖日蓮聖人にて在はすなり」（聖典九九六ページ）が以上の言葉の証明ともなるのである。

開目抄劈頭の「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり所謂主師親これなり」（全集一八六ページ）は、

「大願を立てん、日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経について後生をごせよ。父母の頸をはねん、念仏申さずば、なんどの種々の大難出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり（我が義が破ぶられない限り断乎として従うことができぬ）我日本の柱とならん（主の徳）我れ日本眼目とならん（師の徳）我れ日本の大船とならん（親の徳）等と誓いし願やぶるべからず」

(全集二三二ページ)

の三大誓願に結論されたのである。

(註一) 種々御振舞御書

(註二) この開目抄は、日蓮の魂魄が佐渡にきて雪の中で書いたものだから、霊魂が書いたものだと思えば恐ろしくもあるが、日蓮と因縁あさがらぬ弟子達には年来の関係をおもえば、その人達はなつかしくおもうだろうが、そうでない他人がみたら本当におそろしいと思うであろう。

(註三)、(註四) 開目抄中の御文章

(註五) 法華本門開目抄聞書、保田妙本寺日要、祖滅二百年頃

(註六) 開目抄詳解上、西山本門寺未湛如日応、祖滅三百六十年頃

(註七) 註(五)の引用

(註八) 日昭、日朗、日向、日頂、日持、大聖人さまのお弟子

佐渡が島

